

最終報告書

1. 事業の概要

事業名	熊本県上益城郡山都町矢部地区におけるまちづくり復興支援プロジェクト				
開始日	2016年6月4日	終了日	2016年9月3日	日数	90日間
団体名	通潤橋応援プロジェクトチーム		担当者名	中島 由博	

総額（税込）	1,851,500円	スタッフ人数	2人
--------	------------	--------	----

事業目的	<p>熊本地震により甚大な被害を受けた、山都町のシンボル「通潤橋」の修繕が必要な状況であるが、この地の被害の大きさはあまり報道されていない。通潤橋の修復には莫大な費用がかかる見込みであり、そのための資金をどうやって獲得するのが大きな問題となっている。そこで、「通潤橋応援プロジェクト」を立ち上げ、このプロジェクトを通して、通潤橋が160年前に作られた、日本最大にして現役の通水橋であるという社会的な役割を伝え、テレビや新聞ではなかなか報道されない山都町周辺の被災の現状を広く情報発信をすることで、通潤橋修復に向けた支援や援助への足がかりとする。そして、通潤橋の修繕のみで終わるのではなく、今後の山都町の振興・存続について考える、町づくりの中心的役割を担えるような組織作りをしていくことも、重要な目的の一つである。</p>
事業背景	<p>●通潤橋応援プロジェクトとは</p> <p>熊本地震により、山都町のシンボルである通潤橋が大きな被害を受け、現役の農業用水として活躍してきたこの通潤橋からの放水ができなくなっている。通潤橋は国の重要文化財として指定され、山都町の大きな観光資源でもあるが、被災により町の農業、経済に大きな影響を及ぼすことが懸念される。そのような中、若手の農業従事者や町内の企業・個人事業主らが集まって、通潤橋と町の復興を目的に立ち上げられた。</p> <p>●取り組むべき課題</p> <p>通潤橋は水を通す石管の接合部が破損し、本来の役割である通水が行えない状況。農業用水の安定確保のためにも一刻も早い復旧が必要である。通潤橋からの放水は観光の目玉でもあったが、放水できない状態になっているため、町の観光業にも大きな影響が懸念されている。しかしながら、調査・修復のめどは立っていない。そこで、まずは被災状況を広く発信し、現状を知ってもらうことでより多くの関心を持ってもらい、そこから修復のための支援・援助を獲得できればと考えている。</p> <p>熊本地震以前から人口減少、超高齢化が問題となっており、数十年後には消滅可能性町村であると言われる山都町。今回の地震がこれに追い打ちをかける事態となっ</p>

	<p>ている。このような中で、地元、農・商・工業者、官民学を含め皆が一丸となり、通潤橋の復旧を目指して活動することで、一体感が生まれ、やがて山都町の振興・存続を考える町づくり活動へと展開していくことを期待する。また自らがこの町の担い手であり自らこの町を作っていく主体なのだという認識を醸成していく機会としたい。通潤橋被災は不幸な出来事だが、このタイミングだからできる人・力の集結+広大なネットワークを活用し、あらゆる業種や年代の枠を超え、また旧町村や自治体の枠を超えたオール山都のメンバーが集結することができた。そして、世界・全国の視線が熊本に向けられている今こそ、積極的な情報発信をする好機であると考え、しがらみにとらわれず、通潤橋を応援したい、山都町をよりよくしたいという純粋な想いでこの活動に取り組んでいきたい。</p>
事業内容	<p>コンポーネント① 通潤橋に隣接する田んぼを利用した応援 PR イベント「お田植祭」の実施：</p> <p>2016年6月4日に「お田植祭」を実施。田植え体験、神事の見学、泥んこスポーツ、ライブ、オールドカーミーティングなどの様々な催しが集まる場で、通潤橋の応援 PR を実施。メディアを通じて被災の状況を発信する。</p> <p>コンポーネント② 援農ボランティアのマッチング：</p> <p>これまで通潤橋を含む通潤用水路を維持管理してきた「通潤土地改良区」とともに、通潤用水路の土手草刈り（6月は2回、8月に1回）、通潤橋周辺清掃活動（8月に1回）のボランティアマッチング。</p> <p>コンポーネント③ 修繕資金を集めるためのイベント等企画・実施：</p> <p>通潤橋修繕のための資金的・技術的な支援を集めるための募金活動も含めたイベント等の実施について企画、実施、定例イベント棚田ウォーキングなどと共催。</p>

2. 事業の評価（評価者：公益財団法人佐賀未来創造基金・山田健一郎）

最終評価実施日：平成28年12月13日

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングはよかったか

【コンポーネント①】

- 山都町は移住者の受け入れや農業の振興、そして「通潤橋」を観光資源とした観光産業の街であり、最近では若者が自ら「お田植祭」などのイベントなどを行うことで、地域のつながりを大切にしていこうという地域の機運が育まれようとしていた段階だった。
- そこに、熊本地震が起きたことでお田植祭の存続が危ぶまれているところに今回のCFとの事業がきっかけとなり、地域の連続した営みと繋がりが途絶えることなく、また、被災して厳しい状況の中でも子供から大人までが希望を持ち、持続可能な地域づくりをしていく機会となった。このことは、地震というネガティブな事象を活用して地域がさらにまとまるための良い機会となったと思われることから、事業開始時の状況やニーズに合致しておりタイミングもよく妥当性のある事業であったと考えられる。

【コンポーネント②】

- 細かく見ると援農ボランティア事業は大雨もありボランティアも多くはなく開催時期などで難しい面があったようだが、地域の文化や伝統などを地域の若者が高齢者の方々から学び交流するきっかけになった。このことから地域を巻き込み・若者が主体となり、高齢者もよい影響を受けて年代を超えて開催したよい事業だったといえる。

【コンポーネント③】

- 復旧に向けた“民間”の自主的な取組みとして、いち早く修復基金口座を立ち上げて寄付集めを行い、地域のシンボルである通潤橋の必要性を社会に投げかけたことが、結果として地域社会の関心を生み、参加型の地域づくりを巻き起こし、行政の修復基金創設の時期を明らかに早めた。そのタイミングと意義は非常に大きかったと思われる。

(b) 有効性：目的の達成率

【コンポーネント①】

- お田植え祭は1000人近くの参加者があり、県内外からの来場者や著名人などの参加もよい影響を与えて地元テレビ局などで多く取り上げられた。このことで、なかなか世間やメディアなどに取り上げられなかった地域がお田植え祭を通じて熊本地震復興や通潤橋の復旧に関しての周

知を広げることができた。このことから、概ね目的達成といえる。また、イベントを通じて細かい会議を数多く実施することで地元コミュニティ形成のよい機会になったことが副次的な効果だったと考えられる。

【コンポーネント②】

- 援農ボランティアマッチングは、震災から時間が経過するとともにボランティアニーズが減っていく一方、現地においては関わってくれる人の必要性は大きい。被災した地域のニーズがあったことが明らかであり、期待される事業だった。ただ時期的に大雨や地域の被害状況などが影響して、予定通りの実施が難しかったことや参加者も多くはないという結果となった。支援ニーズやボランティアプログラムの開発、マッチングの手法などにも課題が残るところではあるが、外部のボランティア参加者に地元の若者が地域の伝統や文化などを説明するという機会が生まれ、今まで知らなかった地域の文化や伝統などを地域の若者が高齢者の方々から学び交流する非常に大切なきっかけになったことから地域間の年代を超えたコミュニケーションが深まり、歴史や文化を再認識する機会になった。そして、地域を巻き込んでコミュニティの結束が高まり、若者が主体となって高齢者を連携できる契機にもなった。村民や参加者ともに満足度は高く、村の活気の高まりにもつながり、非常に評価できる点であり、今後の展開に期待が持てる事業だったといえる。

【コンポーネント③】

- 通潤橋の修繕に向けて、まずは必要と信じる市民が声を上げて自ら行動してチャリティイベントやTシャツ販売、義援金BOX設置などを企画運営してファンドレイジング（資金調達）を行い、そこから地域や行政を巻き込んでいった理想的なプロジェクトであったと思われる。
- 市民が寄付口座を自ら作り、基金の旗揚げをして、その後に行政を動かして、行政の窓口や基金口座ができ、国の復興事業として認められて、通潤橋の修繕が可能になる流れがまさに協働事業として地域のモデルとなると考えられる。
- 基金が行政主体に移行してからも寄付金などを行政に託し、協働して広げていく連携体制も、今後国などの支援を受けながら数年かけて修繕に向かう通潤橋を通じての地域の復興・振興には欠かせない財産になると思われる。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

- お田植祭の参加者も1000人を超えるほどのイベントで宣伝効果としても効果があったと思われる。また、従来の地域のつながりをうまく活用してプロジェクトを実施していることから手法も効率よく、単にイベントを実施するというだけでなく、そのプロセスにおいて、高齢者や若者が地域の誇りを改めて感じて、地域のつながりを強くしていくという本プロジェクトの手法は非常に良いと感じている。

- 通潤橋を旗頭にファンドレイジングをすることで、課題を可視化して地域の巻き込みをさらに深めて、行政までの波及効果があり、復旧の目途が立ったということもアウトプットとしては特筆すべき点だと思われ、今後の自立や地域振興に向けて大いに役に立つと思われる。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

- もともと地元の JA 農家青壮年部が主体で観光協会が事務局として入っていることや、加えて他の農家や行政・商工・企業関係を巻き込んでいるということからも、被災地コミュニティの核となるメンバーを中心に今回のプロジェクトを通じて、被災地コミュニティの連携はもとより、さらに地域全体を考えた農商工連携の可能性まで広がったように思われる。
- 終了時のタイミングや方法に関しては、コンポーネント②の援農ボランティアなど次への展開などの課題は残るものの、お田植祭などの地域イベントや通潤橋の復旧のめどが基金などの取り組みが促進されて立ち上がったことから、当初からの計画通り適切なタイミングで次につながる展開を見据えてのプロジェクト終了といえる。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

- お田植祭を通じてイベントの開催というだけでなく、外部のボランティアや参加者への地域の歴史や文化の説明などの機会を通じて、地域の若者と高齢者との交流をつなぎ、自分たちの地域の誇りを改めて見直し、取り戻す良い機会になった。また、メンタル的なものだけでなく、地域の田畑の修復など日常生活の再建にも大きく貢献した。
- 通潤橋という観光資源を改めて見直すことで、新たな動きとして、農家と観光産業の連携、今後のツーリズムの展開が動き出したことから震災前からの課題であった通潤橋に頼らない観光（観光資源としての農業）という新たな地域資源の活用や今後の経済的効果への期待をもたらしたプロジェクトであった。
- また、民間主導で基金づくりを行った結果として、行政を動かして行政基金の窓口ができたことは大きな波及効果だったと言える。
- 課題としては、援農ボランティアの参加者の巻き込みやプロジェクトの継続性に関する内容と思われる。今後、開催時期の再検討や JTB など企業とのツーリズム連携、そして観光協会との連携による事務局体制や財源の確立などが課題としてあげられる。今回のプロジェクトを通しての実施団体の成長・継承、そして地域の中での商工との連携や今後のプロジェクトの関係各所との位置づけの整理、食と農、観光農業ツーリズムの創設など、これからの展開を上記の課題をひとつずつクリアしながら進んでいくことを期待する。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

- ▶ 地域のニーズや価値を特に地元農家の若者たちが被災というマイナスの経験からの本プロジェクトを通じて、改めて感じ取る機会をつくり地域がひとつになり地域の価値と誇りを取り戻していくという派手さはないが地方発のしっかりとした地域づくりの取り組みである。特に観光産業とのネットワークや行政への影響力や関係性向上などを考慮すると、特筆すべき新たなアイデアや手法は数多くはないが、地域の巻き込みの基本である「楽しみながらコトをなす！」ことを常に事業の軸に置くことで、誰もがかかわれる、地域の巻き込みのある持続可能性の高い、被災者にとっても励みとなる、今後のコミュニティの発展が期待できるプロジェクトであることから他被災地域のモデルになるプロジェクトであると言える。

3. 評価者の所感

世間やメディアにあまり取り上げられなかった被災地域を通潤橋という地域のシンボルをキッカケに「お田植祭」や「呑みフェス」、援農ボランティアなどの機会を通じて、SNSやメディアを上手く活用して広く発信するだけでなく、通潤橋修復を旗印に実行力となる民主導の市民基金をいち早く立ち上げ、Tシャツ販売や義援金BOX設置、チャリティイベントなどで、地域や外部の方々を巻き込み、町や国などの行政を動かし、地域の世代間交流を生み出し、実際の修復につなげたことは大きな成果と社会的インパクトを生み出せたと考えられる。

今回のプロジェクトを通じて、被災前からの課題であった通潤橋に頼らない観光資源と地域振興などを改めて見直し、若手と高齢者、農業と観光が結びつき、今後のツーリズムなどの可能性を感じさせる地域のモデル事業になったのではないかと考える。

今後の展開への期待としては、本プロジェクトの地域における位置づけや今後の20代を含めた巻き込み、ツーリズムの動きに期待すると共に「楽しみながら（ワクワク感をもって）実践する！」という代表者のこだわりを次の世代にも継承していくことで、持続可能な地域になり、他地域の地域振興や地域づくりのモデルになればと願っている。